

文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム

IB 教育アドバイザー　好事例共有シリーズ



２０２６年８月６日

茗渓学園高等学校

松﨑　秀彰

IB 生の進路指導

Career and university guidance for IB students

1. はじめに：本校の IB 生の進路指導における基本理念―自己決断力の育成

国際バカロレア（IB）教育においては、「学校独自の文脈」もその教育を形作る重要な要素として位置付けられています（国際バカロレア機構 2022: 3）[1]。本事例も本校の独自の文脈に基づいたものであり、「好事例」といえるかどうかは各学校の文脈や背景に依存する、という前提で、進路指導の事例を紹介させていただきます。

進路指導は学習指導や各学校の教育全般とも強く結びついていると思いますが、本校の教育の基本理念は「自己決断力の育成」です。生徒たちが自分で考え行動できる力を身につけていく、ひいては「どこでも生きていける力」を身につけていくことが必要不可欠だと考えています。そのために IB の生徒・保護者や IB 説明会など、機会を捉えては伝えている考え方や姿勢を、今回はご紹介したいと思います。

2.「他力本願マインド」「サポートが必要マインド」からの脱却

「他力本願マインド」「サポートが必要マインド」とは、進路選択や学習にあたって、過度に学校からのサポートを期待する姿勢です。最終試験の記述式問題に解答するようなミクロな場面から、将来の進路や大学を考えるといったマクロな場面に至るまで、自己決断力は不可欠な力です。そのような場面では自分で覚悟を持ち、自分でなんとかするのだという「断固たる決意」を持って腹を据えて向き合う姿勢が必要不可欠です。IB 生向けのチューターや個別対応の塾などもありますが、不安に煽られてすぐ飛びつくのではなく、まずは自分で工夫して試行錯誤して向き合ってみる、そこからこそ「学び方を学ぶ」機会も生まれるはずです。「効率よく」学べるという言葉に踊らされると、「学び方を学ぶ」機会を効率よく逃すことにもつながるかもしれません。

海外大学に進学しようという生徒ならなおさら、学習も含めて手取り足取りのサポートは控えるべきではないかとも考えています。例えば大学のホームページから情報を読み取り出願する方法を見つけ出すことができないようでは留学など難しい、と生徒たちにも伝え、どうしても分からないことがある時のみ必要最小限のサポートをしています。エージェントの利用も、自分で考えて必要があると思えば利用するように伝えています。

3.「ショッピングの論理[2]」からの脱却

「ショッピングの論理」とは、「よい」教育を「安く・早く・楽に・効率よく」手に入れようという姿勢です。IB での学びにはこれとは真逆の姿勢が必要だと思います。「よい」教育も人それぞれ。IB での学びには、苦労

---

[1] 「IB の理念を各学校固有の文脈の中に適切に統合する」（国際バカロレア機構 2022: 2）ことが、『基準と実践要綱』の枠組みの特徴として述べられています。参考文献: 国際バカロレア機構. (2022).『プログラムの基準と実践要綱』.

[2] オランダの教育哲学者、ガート・ビースタ氏が述べている考え方です。

をしてでも自分を鍛えたいという姿勢が不可欠です。日本の大学の IB 入試は定員が少なく運の要素もあるため、合格できるか不確定な面もあると思います。「日本の大学に行きたいけれども IB で学びたい」という生徒たちには、「進路の不確定さはあれども高校ではこのような学びをしたい・自分を鍛えたい」というこだわりがあるように思います。「日本の大学に行きたいのであれば IB は『不利』」という考え方も巷にはあるようですが、それと違う視点を持つには「ショッピングの論理」からの脱却が必要になるのではないかと思います。

4.「業績による承認」より「存在による承認」[3]

「業績による承認」とは、テストのスコアや合格大学の「ランク」などの「眼にみえる」結果による評価に基づく、主に「他者からどうみられるか」という認識に基づく承認、「存在による承認」は一人一人の独自の経験や価値観などに焦点を当てた、「生まれてきてくれてありがとう」という認識に基づく承認で、保護者や教師からの承認もあれば生徒自身による自己承認もあると思います。本校では「スコアは side effect」という考えのもと、「存在による承認」を重視して機会を捉えて伝えるようにしています。昨年度卒業の IB クラスでは年間を通して HR で全員の誕生日を祝う取り組みなども行いました。他者との比較ではなく敵は自分、与えられた条件の中で自分のベストを尽くせばそれで OK、IB では全てを 100%で全力で行うことは難しい、等も重要。他者と比較してしまうと生徒のポテンシャルを十分に引き出せないことも多々あるのではないかと思います。

5. おわりに

国内の IBDP 校の増加と共に、ネット上でも学校の平均スコアや大学合格進学実績などの、主に「業績による承認」の考え方に根ざした真偽不明のさまざまな情報が飛び交うようになりました[4]。本校にも「学校の IBDP スコアの平均点を教えてください」とか（平均点以下の生徒たちの学びの価値を下げて否定するようにも思えるので公開していません、と返答しています）、「学校はどのようなサポートをしてくれるのでしょうか」（生徒の自己決断力を効果的に奪うこととなるので手取り足取りのサポートはしていません、もし手取り足取りの手厚いサポートをご期待されているのであれば、本校はご希望に沿うことは難しいかと思います、と返答しています）のような問い合わせも増加する中で、眼にみえる明確な結果や、「役に立つ」かどうか、「有利・不利」でものごとを考える「有用性重視」の考え方に抗ってみています。過去には DP 獲得ができなかった生徒たちもいますが、彼らの学びに意味がなかったなどということはまったくなく、彼らも本校の自慢の IB 修了生・卒業生です。

とはいえもちろん進路指導に関してサポートはしておりますが、主に「機会の提供」となります。7 月には 11 カ国の海外大学に進学した・する予定の卒業生 24 名が学校に集まり、大学や進路の話をしてくれました(112 組 228 名の生徒・保護者が参加)。校内での国内・海外の大学の説明会も頻繁にあります。また高 3 の生徒から大学や奨学金等の志望理由書の添削や面接練習を依頼されればそれらも受けますが、生徒によってはそれらをまったくなしで合格・進学していくこともあります。サポートを受けるか否かの判断も生徒に任せています。

自己決断力を身につけるには自己決断の機会が必要ですし、思い通りにいかないことを乗り越える力をつけるには思い通りにいかない経験が必要であり、これらも含めた IB での学びは本当に過酷です。しかし本質的な学びを追究するマインドや姿勢を持つ生徒達にとっては「努力する価値のある努力」であると考えています。

---

[3] 主に教育社会学などの分野で提唱されている考え方です。

[4] 主に日本語で DP 科目を受講する「日本語 DP」は海外大学には通用しないという誤った憶測や、「日本語 DP」=「バイリンガル DP」という誤解もまるで「真実」であるかのようにまかり通っているため、説明会などの機会で指摘しています。

6. 補足資料：海外大学進学のための奨学金の獲得について

海外大学の進学の検討には、同時に奨学金の獲得の検討が必要になってくるかと思います。

どうしても海外大学に行きたい、という場合には、マレーシアやヨーロッパの大学など、奨学金が取れなかった場合にも学費や生活費が比較的高価でない選択肢も検討してもらったりもしています。

海外大学進学のための奨学金として本校の生徒が獲得することが多いのは日本学生支援機構(JASSO)の奨学金です。準備しなくてはならない書類も多いですが、それらの準備も生徒の自主性にまかせています。早い段階から準備をしたり志望理由書の相談に来る生徒もいれば、すべて自分で準備をして出願する生徒もいます。留学したい理由だけでなく、留学後、1 年目～4 年目までそれぞれどんな学びをするか、学部終了後の計画など、かなりの分量の書類の準備が必要となるので、もし出願を考えているのであれば早めに準備をするように伝えています。10 月のはじめが例年出願締切なので、夏休み中には書類の作成がある程度終わっているのが理想的だと思います。1 月に書類審査の結果が出て、生徒が希望すれば面接の練習などもしています。最終的な合格発表は 3 月上旬で、多くの日本の大学の入学手続きは済んでいる時期です。日本の大学と併願している場合には、ここで合格であれば海外大学、奨学金不合格の場合には日本の大学、という選択をする生徒もいます。

また柳井正財団も 3 年ほど前からようやく合格者が出るようになりました。合格者の中には外部の研究者の方にご指導いただきながら、共著で主著者として学会に論文を投稿し、査読を経て掲載された生徒もいました。認知症の早期発見を目指したツールに関する論文で日本感性工学会の学会誌に掲載された生徒は、産業総合研究所の脳科学がご専門の先生のご指導を受けつつ主著者として論文を執筆しました。天文学の世界で最も権威ある学術誌の一つとも言われている Astrophysical Journal 誌に、査読を経て主著者として掲載された生徒は、太陽系の外にある惑星(系外惑星)の空に浮かぶ雲の粒が、恒星の光で熱せられて消えてしまわないかを計算し、どんな成分の雲なら実際に存在できるのかを明らかにした研究に、国立天文台の先生に指導をいただきながら協働で取り組みました。いずれも高校在学中にやりたいことを見つけて、興味・関心を深めていきました。合格者はスタンフォード大学、コロンビア大学、エジンバラ大学、プリンストン大学などに進学しています。

大学から合格と一緒に奨学金のオファーが来ることも、特にアメリカのリベラルアーツ大学ではよくあります。年間 3 万ドル前後が多いですが、最高で年間 5 万ドルの奨学金を獲得した生徒もいました。IB のスコアや高校 3 年間の評定の平均である GPA が高ければ高い額をもらえるようではないようで、エッセーなども含めて総合的に判断されるようです。たいてい合格の通知とともに大学からお手紙が来て、年間の学費、獲得した奨学金の額、アルバイトをした場合に得られる収入、それらを加味して 4 年間でどのくらい費用がかかるか、などが記されています。いくつか合格があれば、その中から学費や学べることなどの条件を考慮して、進学先を決定していくこととなります。

将来やりたいことがまだ定まっていないという高校生も多いと思います。自分の「やりたいこと」は、自分の知っている範囲や想像できる範囲に限られるため、知識を獲得したり学んだりする中で「やりたいこと」が変わるのも必然だと思いますし、それは大人になってさえも変わり続けるものかもしれません。しかし、奨学金を得るためにはある程度の将来のビジョンは必要で、それをいかに他者に分かりやすく伝えられるかが重要だと思います。CAS などで将来やりたいことに関係した活動をするのも、より深く自分を知るために有効だと思われます。IA や EE などを通して将来やりたいことをひらめく生徒もいます。心のアンテナをいつも張っておいて、すべての学びや経験はつながると考えることも大切かもしれません。内なる自己の「衝動」を見つけてその幅を広げることも、もしかしたら学ぶことの目的の 1 つなのかもしれませんね。